

濃密な鷗外六〇年の生涯

長谷川 修

今年は森鷗外の生誕一六〇年、没後一〇〇年に当たることから、「鷗外記念館」では通年に亘り特別展を行っている。記念館は千駄木の団子坂を登った高台にあり、鷗外の旧居跡に一〇年前に開館した。旧居の二階一畳の座敷は「観潮楼」と名付けられ、彼を敬慕する文学青年達が歌会や談話を楽しんだ場所で、当時は品川の沖が望めたと云う。先日記念館を初めて訪ねたが、明治時代と変わらず静かな高台にあり、海は見えないもののスカイツリーの全容が望めた。

現在開催中の特別展のテーマは「読み継がれる鷗外」で、『舞姫』『ウイタ・セクスアリス』『雁』『山椒大夫』等の創作小説に関する展示が中心だった。

興味深い展示品が多かったが、先ず鷗外訳『即興詩人』の初版本があった。これは訳者前書きにあるとおり、老眼の進む母親に読んで貰おうと、普通より大きい活字で出版したものである。

二つ目には、『舞姫』のモデルとなったエリーゼが、鷗外に贈ったハンカチ入れた。六〇cm平方程の正方形の布地で、綺麗な刺繍を施した真ん中に、大きくRとMの文字を縫い込んでいる。

初めて知り驚いたのは大逆事件の資料で、弁護士平出修ひらひでしゅうの弁論手控えや、幸徳秋水が獄中から平出に宛てた感謝の手紙が展示されていた。平出は鷗外の和歌の弟子でもあり、社会主義思想に関して鷗外から教えを受け、また被告二四人が死刑にならない様にと密かに相談している。一方で、陸軍軍医総監の鷗外は陸軍の巨魁山縣有朋とも近く、大逆裁判の結審についてはブレインの一員として加わっている。被告、原告双方から頼りにされた鷗外の立場は微妙なもので、本人が裁判に関し語っているものは何もなく、思いは『沈黙の塔』『食堂』『大塩平八郎』等の作品に窺える。

鷗外は、軍医官僚としてトップに昇りつめ、文学者として最高級の作品を数多く残し、家庭人として家族から慕われていた。

苦労もあつただろうが、充実した六〇年の生涯を全力で駆け抜けたと言えよう。